

法王の辞任問題について

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

法王の辞任問題について

現ローマ法王フランチェスコは、スペインの日刊紙『Abc』のインタビューに次のように述べている。

法王は、昨年からの右膝の痛みが増したため、入院して治療を受けた。しかし、完治するどころか、退院して以降、膝の状態はむしろ悪化したようだ。10月ごろから11月にかけてはさらに痛みが増し、公共の移動には、車椅子を使うようになった。その後、12月に入ってから膝の痛みも減ったということだが、クリスマス・イヴの儀式の様子をテレビで見ていると、例年ならば、法王自らが儀式を勤めるところを、代理人が勤めていた。

法王の辞任ということは、今日にあっては珍しいことではない。前法王ベネディクト16世は、10年近く前に「扉は開かれた」ということで、「教会内部の混乱」を理由にして、法王の職を辞した。法王辞任の問題については、1965年5月2日、時の法王パオロ6世によって署名された書類がある。現法王フランチェスコは、法王就任後に、その類の書類に署名し、時のヴァチカンの国務長官ベルトーニに渡している。その書類は、その後国務長官に就任した現カーディナル・パロリンに渡されているだろう。

フランチェスコは2013年3月13日に選出されている。ベルトーニはその年の10月の半ばまで勤めていた。その後はパロリンが国務長官の地位についている。ピオ12世もそのような書類に署名しているが、彼が署名した理由は、健康問題とか教会内部の問題とかによるものではない。当時、ナチスドイツのヒトラーによるピオ12世の逮捕、あるいはヴァチカンから他の場所へと連行すると考えられたので、その時に備えて、サインしているのだ。パオロ6世の場合には健康問題に関していた。彼は病が重く、キリストの使徒としての役目を十分に遂行できないと考えられたからだ。

法王フランチェスコの署名の理由も、パオロ6世のように、病に関係するものだった。しかし、法王は、今はまだ自分には「判断」する能力があり、「知識」もあり「良識」もあると言う。だから、今のところ、フランチェスコは法王の勤めを辞める意向はない。法王は1月31日から2月の末にかけて、アフリカのコンゴ共和国、南スーダンに司牧の旅をする予定だ。今では、法王は、膝がかなり良くなっており、膝の手術をしなくてよかったとも思っている。法王はこのインタビューの中で最後にこう語った。「いつも行動を規定するのは頭なのだ、膝ではない。私はイタリアの神父たちには『頭が正常に働く限り、前に進んで行くつもりだ』と。

前法王死去

前法王ベネディクト16世は、2022年12月31日午前9時34分、ヴァチカン内で息を引き取った。享年95歳。前法王は1927年、ドイツ・ミュンヘン近郊の町で生まれた。若き頃より神学に通暁し、ミュンヘンの大司教にも任命されていた。この時、彼が天理教のドイツ布教公認のために一肌脱いでくれたことは、天理教の海外布教にとって大きな一歩となったのは、特筆すべきことであろう。

その後、法王ジョヴァンニ・パオロ2世の要請で、ヴァチカンに移住。教義聖省の長官となり、大きな業績を残した。この法王ヨハネ・パオロ2世の死去に伴い、その後のコンクラーベ

で法王に選出され、ベネディクト16世と名乗った。しかし、各種の問題が持ち上がったため、2013年2月に法王の職を辞任すると宣言した。2022年12月31日、そして年を跨いで2023年1月1日には前法王ベネディクト16世を懐かしむ声、あるいは神学者としての功績を称える声がメディアで大きく取り扱われていた。1月2日から4日まで、一般信者との最後のお別れをするためにヴァチカンのサン・ピエトロに遺体が安置され、1月5日には現法王フランチェスコによって葬儀がなされた。

現法王の難民についての見解

法王は、人間の生命は大事であり、その生命は救われなければならないと主張する。東南アジア、アラビア、アフリカから多くの難民たちが、地中海を渡って、イタリア、ギリシャ、スペイン、キプロス島にやってくる。出発場所はアフリカのチュニジアが中心だ。イタリア最南端のランペドゥーザはそのチュニジアから、わずか110kmのところにあるために、チュニジアから満載に積み込まれた難民が、ゴムボートに乗って大量に渡ってくるのだ。

近距離といえども、地中海も海だ。強風が吹き、海も荒れることがある。生憎その時に遭遇したゴムボートは操縦もできなくなってしまい、海に放り出される人も出てくるのだ。犠牲者がたくさん出てくるのだ。ヨーロッパ共同体(EU)は、そういう難民を救わなければならないと主張する。だが、難民たちが直面する困難となるのは南ヨーロッパの国々だ。中央から北の国々は、難民を救わなければいけない、あるいは救けるのは義務だと高言している。しかし、イタリア、ギリシャ、スペイン、キプロスなどからすれば、国力を使い、国費を使って、難民を救済しているのに、北の国々は一体何をしているのかという不満がある。ただ、難民を救え、救えと言っているだけで難民の救済や難民の自国入国に関しては知らぬふりをしているのではないだろうか。難民の多くはヨーロッパの南の国に上陸しても、そのあとは北の国々へと行きたがっているのだ。

法王はこういう傾向に警鐘を鳴らしている。難民問題は地中海に面した国の力だけでは何も解決しないのだ。中部・北部ヨーロッパの国々の手助けで、問題が解決するだろう。以前、ドイツのメルケル首相が語ったように、アフリカからの難民がヨーロッパに流れてこないように、アフリカの国々の生活レベルを向上させることが第一だ。法王もこの意見には基本的に同調している。

ヨーロッパへの難民の実態も変わってきている。かつては、難民の内訳は、アジア人、アラブ人が多かった。少し前からは、アフリカからの難民が多くなった。しかし、今ではエジプト(地図上ではアフリカだ)、そしてチュニジア、バングラデシュ、シリア、アフガニスタンと続いている。つまり、どこもかしこも政情不安定なところから、政情の安定したヨーロッパへと流れてきているのだ。難民の数も年を追うごとに増える一方だ。2020年には難民の数は3万4,134人だったのが、2022年12月27日には10万1,922人と大幅に増加している。

ヨーロッパにとって深刻な難民問題であるが、そうした中で人道的立場を貫く法王の姿勢が今後いっそう注目されるだろう。